

【漁況】

[マアジ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、昭和40年の53万トンにピークに減少傾向となり、昭和55年には5万4千トンとなりました。

その後増加傾向に転じ、平成8年には33万トンに増加し、平成10年までは30万トン台で推移しましたが、再び減少傾向に転じ、平成24年も13万4千トンと低調に推移しました。

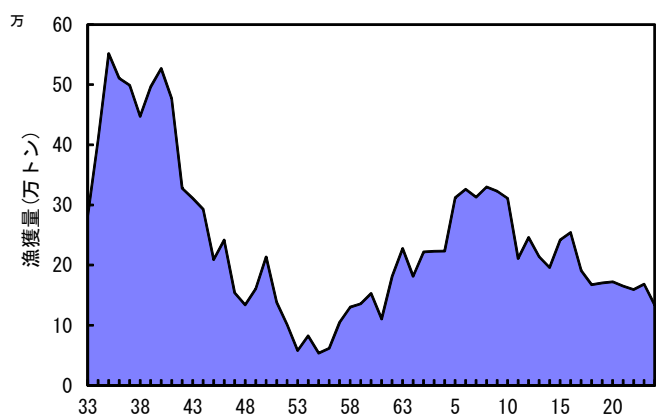


図 全国のマアジ漁獲量の推移

年

2. 平成26年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、7月に甑島北沖、8月に串木野沖で漁場が形成されました。

薩南海域では、8月に島間沖、9月に開間沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、マアジ仔・豆（0歳魚：平成26年生まれ）主体に672トンの水揚げで、前年の180%及び平年の93%となりました。

3. 平成26年10～12月期の見とおし

漁獲の主体は、マアジ仔・豆（0歳魚：平成26年生まれ）で、マアジ小・中（1・2歳魚：平成25・24生まれ）も混じるでしょう。

来遊量は、前年・平年を上回るでしょう。

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

漁獲主体となるマアジ0歳魚は、6月以降順調な漁獲があり、前年・平年を上回ると考えられます。また、1歳魚以上も8・9月にややまとまった漁獲がみられました。以上のことから、全体としては、前年・平年を上回ると考えられます。

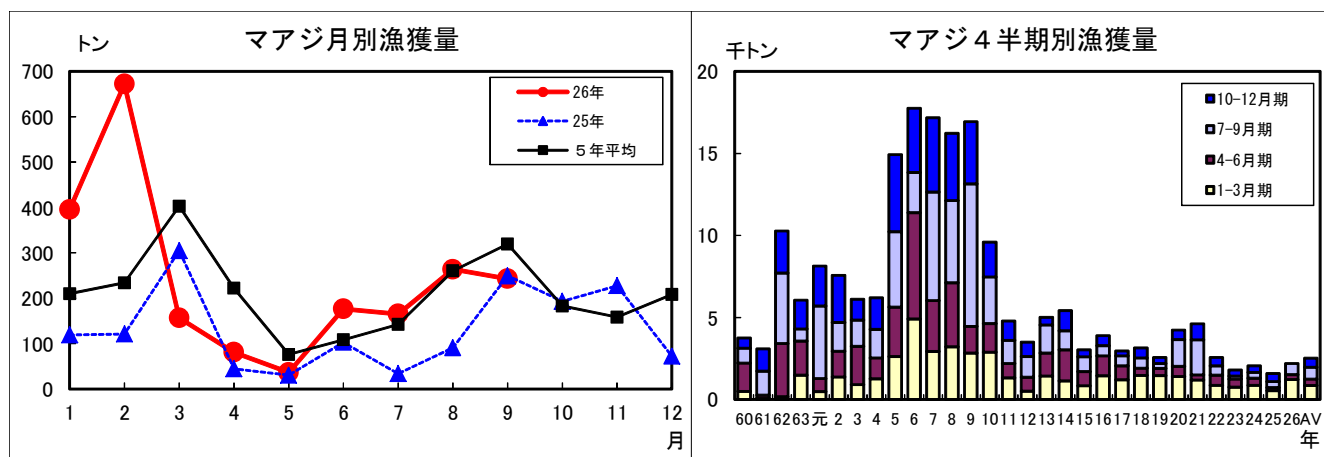


図 マアジまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年（平成21～25年）の平均値(AV)，平成26年9月24日までの水揚げ量を使用

[サバ類]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のサバ類の漁獲量は、昭和53年の160万トンにピークにマサバ資源水準の低下により年々減少し、昭和57年には72万トンとなりました。昭和63年以降はゴマサバの資源水準も低下したため、サバ類の漁獲量は大きく減少しましたが、平成5年から増加に転じ平成9年には84万9千トンまで増加しました。その後再び減少し、平成14年は28万トンになりました。平成17年・18年は再び増加しましたが、平成19年以降減少傾向にあり、平成24年は44万3千トンとなりました。

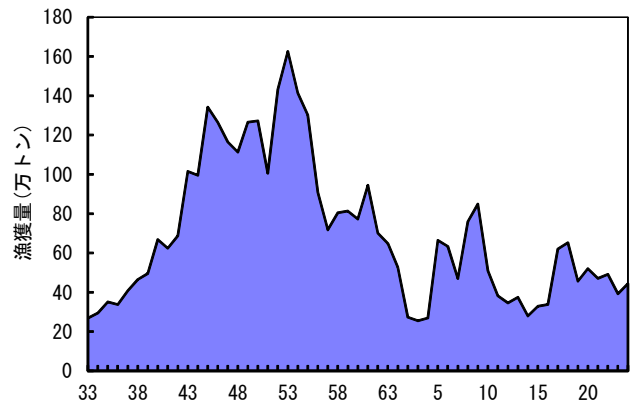


図 全国のサバ類漁獲量の推移 年

2. 平成26年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、漁場は形成されませんでした。

薩南海域では、7月に馬毛島沖、8月に野間池、島間沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、ゴマサバ豆(0歳魚：平成26年生まれ)主体に、ゴマサバ中(2・3歳魚：平成24・23年生まれ)混じりで1,959トンの水揚げで、前年の105%及び平年の48%となりました。

3. 平成26年10～12月期の見とおし

漁獲の主体は、ゴマサバ豆(0歳魚：平成26年生まれ)及び小(1歳魚：平成25年生まれ)となるでしょう。

来遊量は、前年並で平年を下回るでしょう。

(根拠)

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

ゴマサバ0歳魚は、7・8月にややまとまった漁獲がみられましたが、9月には低調となりました。また、1歳魚の漁獲もかなり低調に推移していることから、全体としては、前年並で平年を下回ると考えられます。

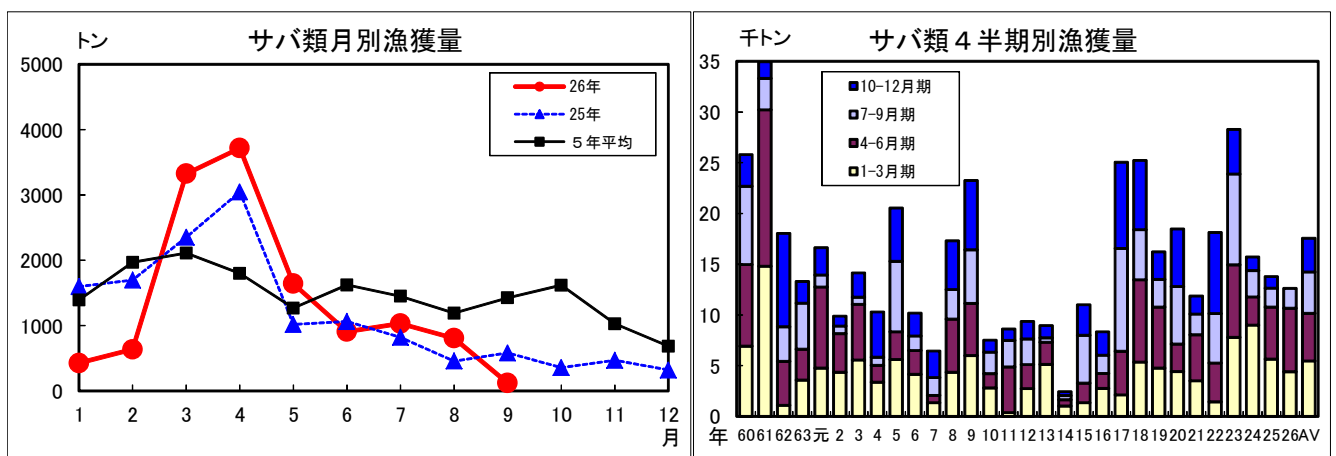


図 サバ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年(平成21～25年)の平均値(AV)、平成26年9月24日までの水揚量を使用

[マイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は、昭和30年代から40年代にかけての不漁期の後、昭和48年頃から増加の傾向が見られ、昭和63年には449万トンまで増加しました。

しかし、平成元年から全国的に漁獲量は減少を続け、平成17年には3万トンとなりました。

平成23年は18万トンと平成14年以降10年ぶりに10万トンを超える漁獲があり、平成24年も17万トンの漁獲がありました。

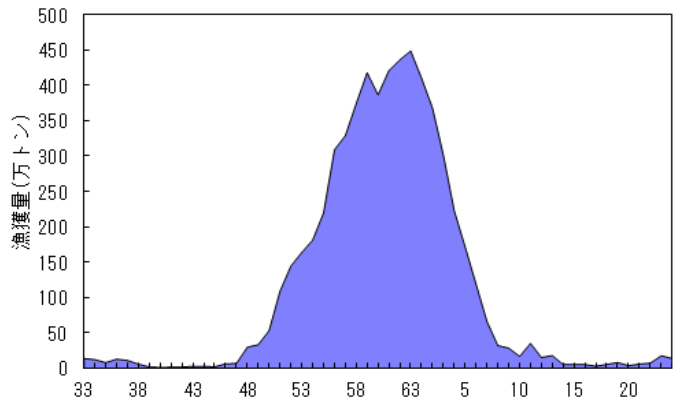


図 全国のマイワシ漁獲量の推移 年

2. 平成 26 年 7～9 月期の漁況の経過

【4 港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、甌島周辺、長島、天草沖で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、野間池、佐多沖で漁場が形成されました。

北薩海域の棒受網では、川内沖から長島で漁場が形成されました。

4 港計のまき網では、小羽(0 歳魚：平成 26 年生まれ)主体に 1,950 トンの水揚げで前年の 67%，平年の 263% でした。

北薩海域の棒受網は、68 トンの水揚げで前年の 53%，平年の 103% でした。

3. 平成 26 年 10～12 月期の見とおし

漁獲の主体は、小羽(0 歳魚：平成 26 年生まれ)でしょう。

来遊量は前年を下回り、平年並でしょう。

(根 拠)

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

前期(7～9 月)は、好漁であった前年ほどの来遊は見られませんでした。近年としては、まとまった漁獲が見られていることから、前年は下回るものの、平年並の来遊は見込めるものと考えられます。

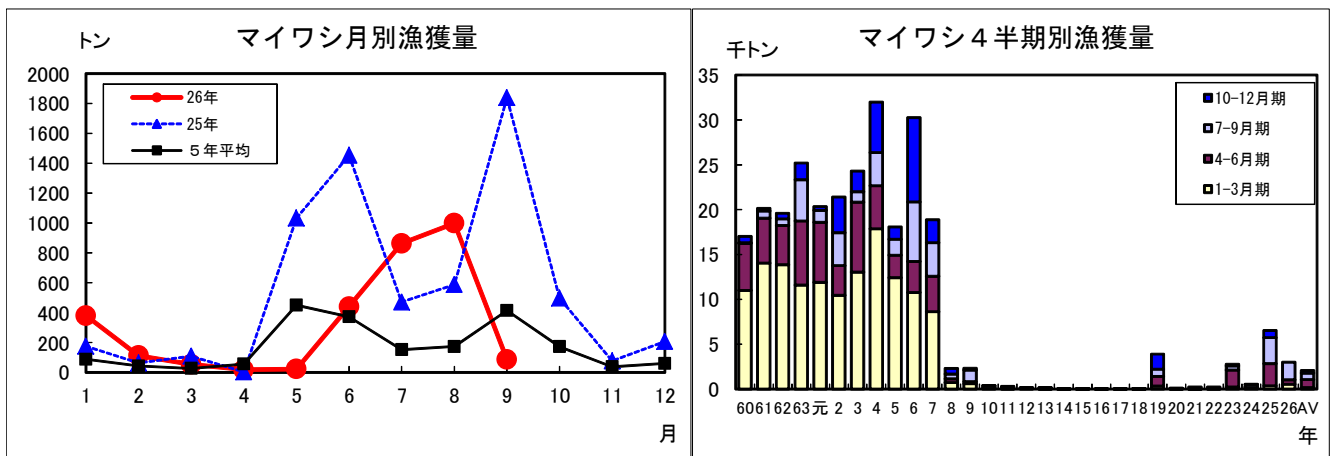


図 マイワシまき網漁獲量変化(4 港計)

※平年値は過去 5 年（平成 21～25 年）の平均値(AV)、平成 26 年 9 月 24 日までの水揚量を使用

[ウルメイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は、昭和30年代から60年代にかけて3～5万トン前後で推移しました。

その後、増減を繰り返しながら増加傾向を示し、平成6年に6万8千トンとなりましたが、翌年以降減少傾向に転じ、平成12年は2万4千トンとなりました。

平成15年以降は再度増加傾向に転じ、平成23年には8万5千トンと昭和33年以降最高の漁獲量となり、平成24年も8万1千トンと好調に推移しました。

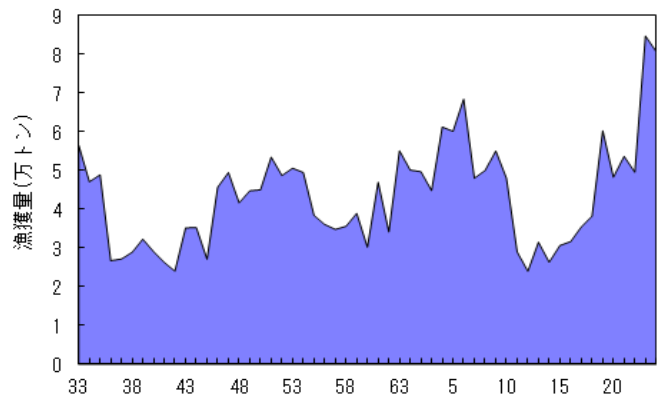


図 全国のウルメイワシ漁獲量の推移

2. 平成 26 年 7～9 月期の漁況の経過

【4 港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、甌島周辺、天草沖に漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、野間池、佐多沖、内之浦沖に漁場が形成されました。

北薩海域の棒受網では、川内沖から長島で漁場が形成されました。

4 港計のまき網では、小羽（0 歳魚：平成 26 年生まれ）主体に 2,334 トンの水揚げがあり、前年の 55 %、平年の 108 %でした。

北薩海域の棒受網では、704 トンの水揚げで前年の 74 %、平年の 62 %でした。

3. 平成 26 年 10～12 月期の見とおし

漁獲の主体は、小羽（0 歳魚：平成 26 年生まれ）でしょう。

来遊量は前年を下回り、平年並でしょう。

（根 拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期も 0 歳魚（平成 26 年生まれ）主体の来遊となります。0 歳魚は、4 月以降まき網、棒受網ともに一定の漁獲が続いていることから、好漁であった前年は下回りますが、平年並の来遊は見込めるものと考えられます。

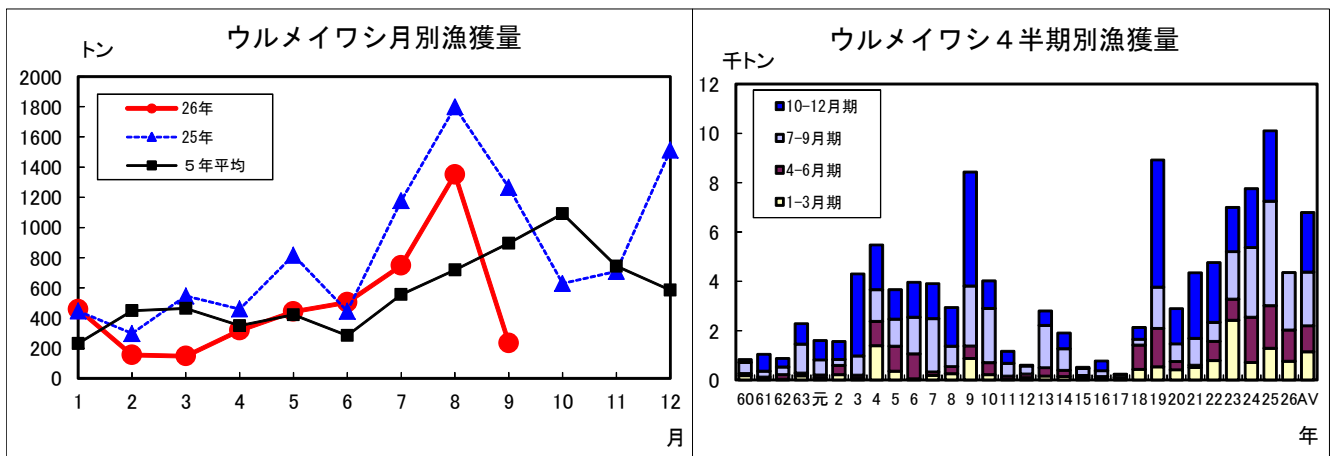


図 ウルメイワシまき網漁獲量変化(4 港計)

※平年値は過去 5 年（平成 21～25 年）の平均値(AV)、平成 26 年 9 月 24 日までの水揚げ量を使用

[カタクチイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のカタクチイワシの漁獲量は、昭和48年まで30万トン台で変動していましたが、昭和49年以降減少傾向となり昭和54年には13万トンとなりました。

その後、徐々に漁獲量は増加し昭和59年には22万トンとなりましたが、昭和62年には再び14万トンまで減少しました。

昭和63年以降は大きく増減を繰り返し、平成15年は過去最高の53万5千トンとなりましたが、その後減少傾向に転じ、平成24年は24万5千トンとなりました。

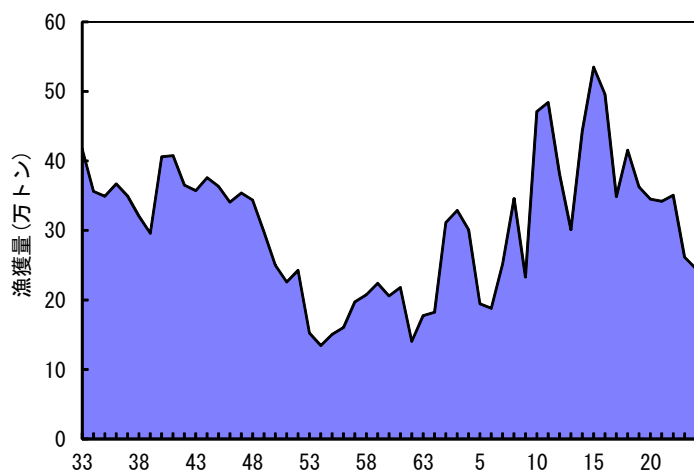


図 全国のカタクチイワシ漁獲量の推移

年

2. 平成 26 年 7～9 月期の漁況の経過

【4 港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、主に天草沖、長島、甌島周辺に漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、野間池、内之浦沖に漁場が形成されました。

4 港計のまき網では、中羽（平成 25, 26 年生まれ）、大羽（平成 25 年生まれ）主体に 2,189 トンの水揚げがあり、前年の 178 %、平年の 339 %でした。

北薩海域の棒受網では、長島に漁場が形成され、中羽（平成 25, 26 年生まれ）主体に 203 トンの水揚げがあり、前年の 61 %、平年の 74 %でした。

3. 平成 26 年 10～12 月期の見とおし

中羽（平成 26 年生まれ）と大羽（平成 25 年生まれ）が漁獲の主体で、来遊量は前年、平年を上回るでしょう。

（根拠）

西薩海域の前年の秋季～本年の春季の BATCH 網漁は低調であったが、9 月の漁況は前年、平年を上回り好調であることから、前年、平年を上回る来遊は見込めると考えられます。

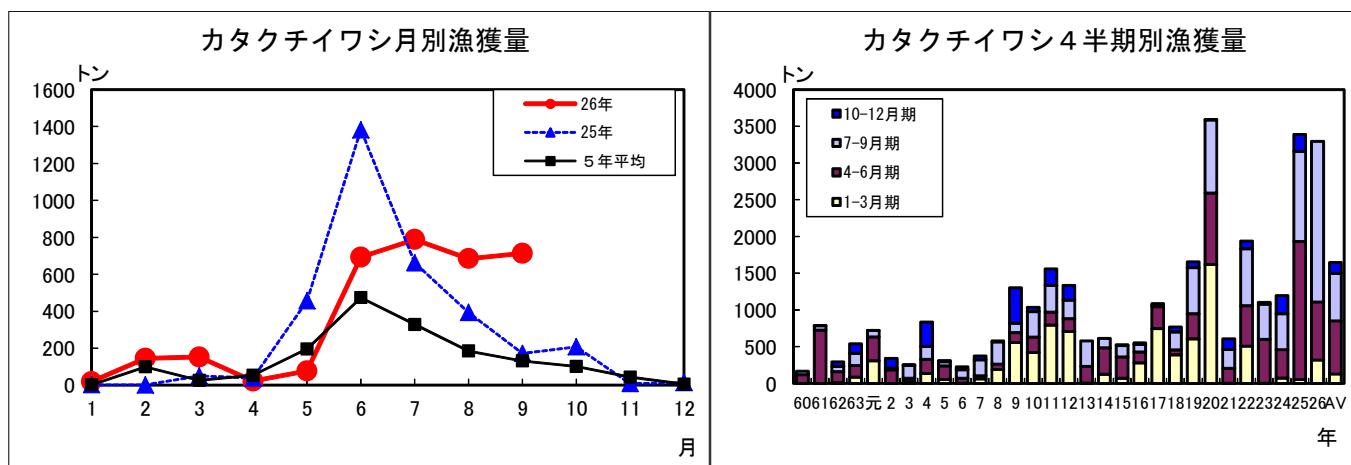


図 カタクチイワシまき網漁獲量変化（4 港計）

※平年値は過去 5 年（平成 21～25 年）の平均値(AV)、平成 26 年 9 月 24 日までの水揚量を使用

[イワシ類参考資料]

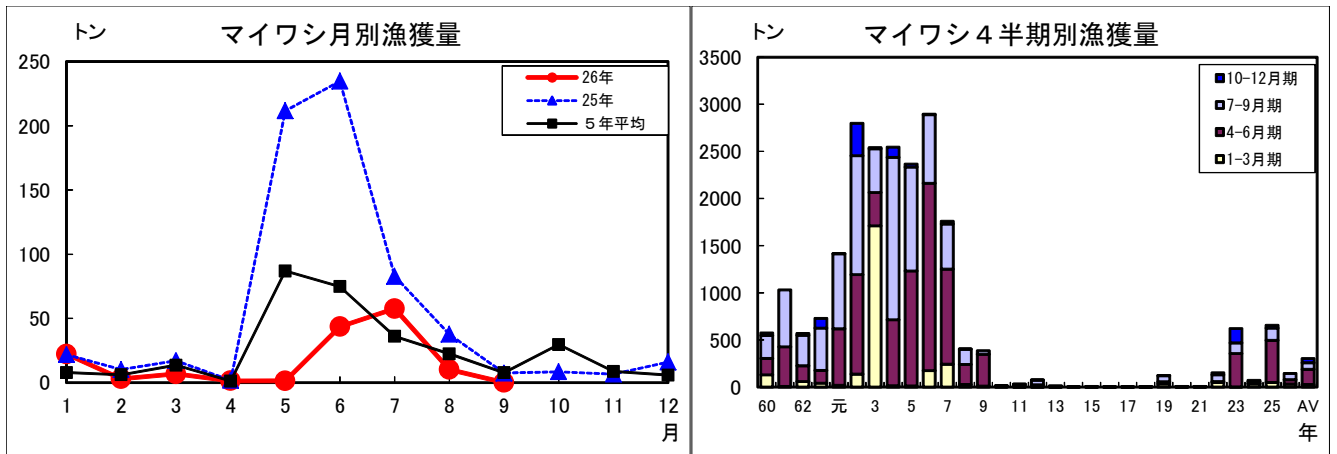


図 マイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

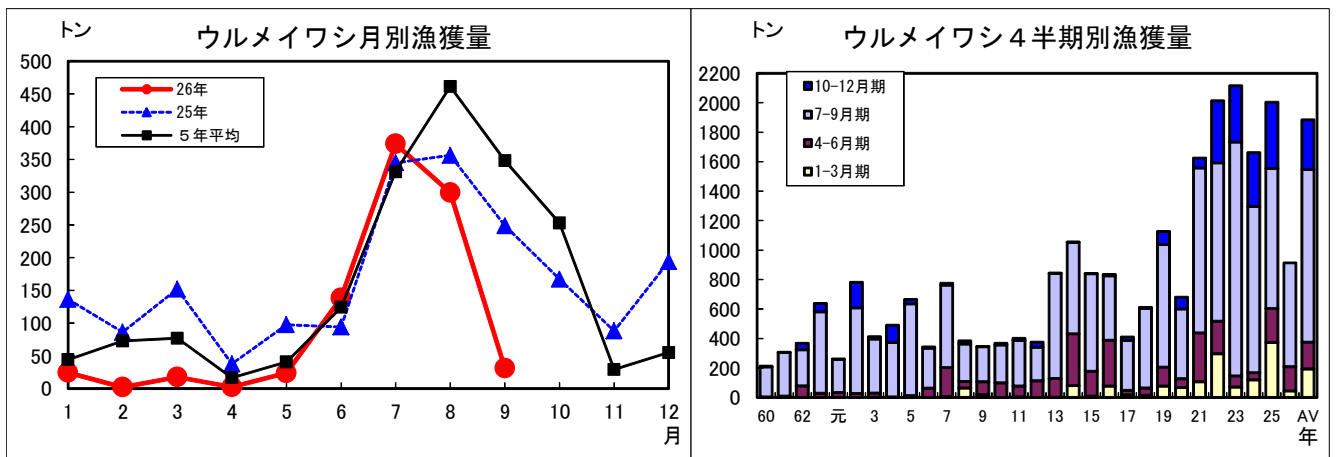


図 ウルメイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

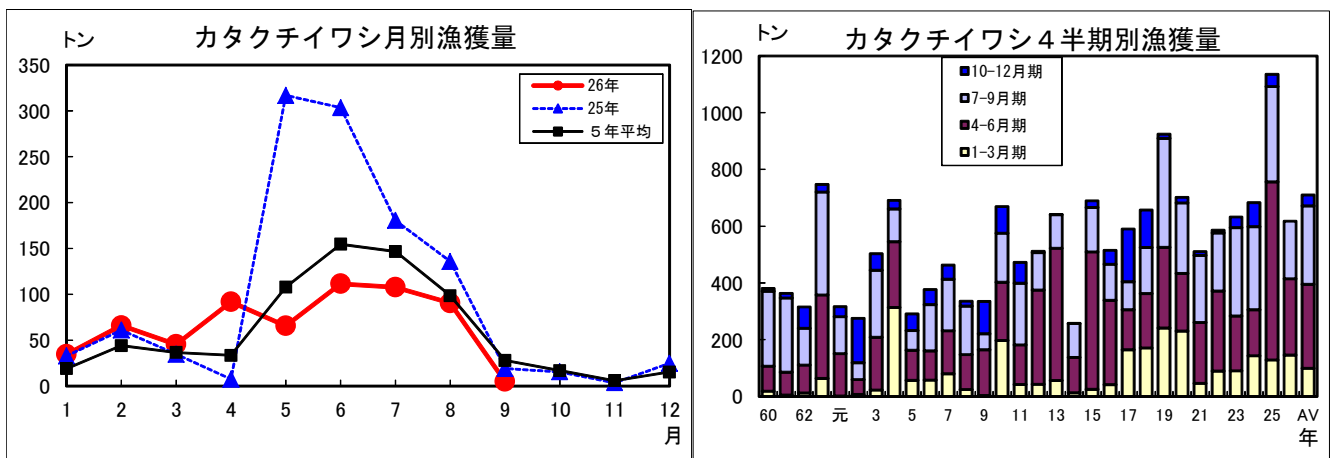


図 カタクチイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

※平年値は過去5年(平成21~25年)の平均値(AV),平成26年9月24日までの水揚量を使用

[参考：漁況経過のみ記載]

〈ムロアジ類（クサヤモロ，モロ）（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

1. 経年変化及び平成26年7～9月期の漁況の経過

ムロアジ類の漁獲量は、平成2年の21,700トンピークに急減し、平成6年以降は、1,500トンから4,500トンの間での推移しており、平成25年は3,512トンとなりました。

平成26年7～9月は、薩南海域では、散発的な漁獲に留まり、期全体で130トンの水揚げで、前年の31%及び平年の21%と低調に推移しました。

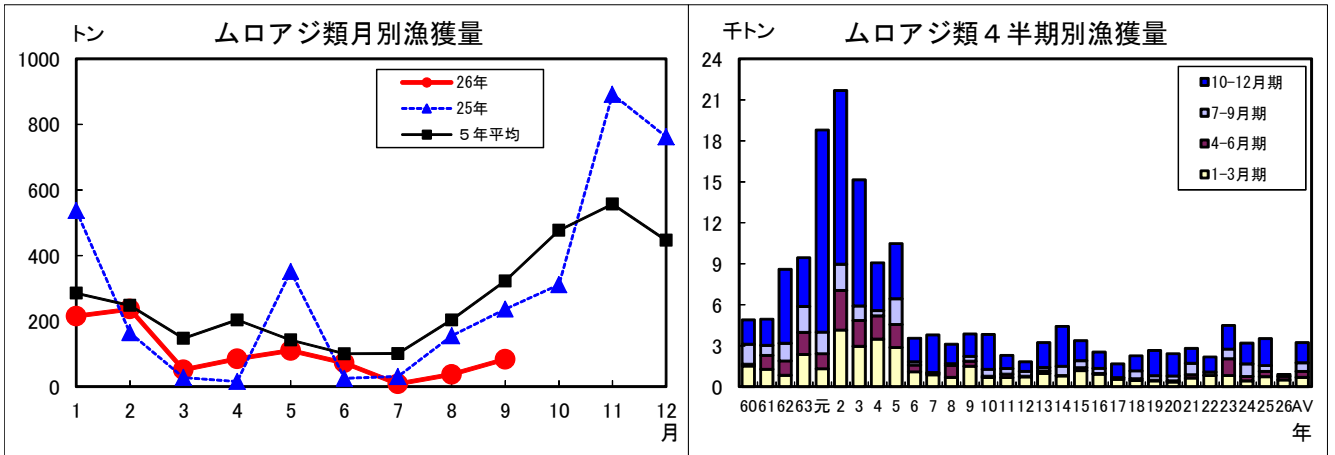


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成21～25年）の平均値(AV)，平成26年9月24日までの水揚げ量を使用

〈オアカムロ（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

1. 経年変化及び平成26年7～9月期の漁況の経過

オアカムロの漁獲量は、平成元年の5,300トンピークに一旦減少し、平成7年に4,400トンと再度ピークを迎えた後は減少傾向となっていました。平成20年は2,291トンと一旦増加しましたが、再び減少傾向で平成25年は1,622トンとなりました。

平成26年7～9月は、薩南海域では、8月に屋久島南、9月に竹島で漁場が形成され、期全体で150トンの水揚げで前年の79%及び平年の64%となりました。

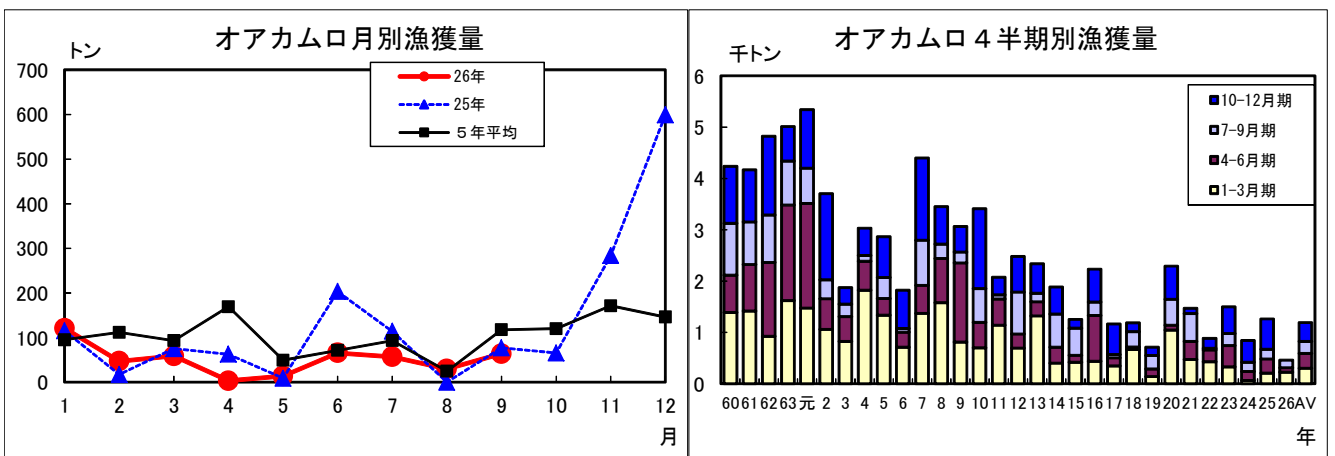


図 オアカムロまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成21～25年）の平均値(AV)，平成26年9月24日までの水揚げ量を使用

〈マルアジ（アオアジ）（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

1. 経年変化及び平成26年7～9月期の漁況の経過

マルアジの漁獲量は、昭和62年から平成元年に1,500トンを超えるピークがあり、その後低調に推移し、平成12年から15年に再度ピークを迎え15年には3,150トンと最高を記録しましたが、平成16年以降は低調に推移し、21年は過去最低の94トンとなりました。

22, 23年はやや増加したものの依然低調で、25年は392トンとなりました。

平成26年7～9月は、7月に長島、8・9月に串木野沖でマルアジ小主体の漁獲があり、期全体で195トンの水揚げで、前年の638%及び平年の544%と好調に推移しました。

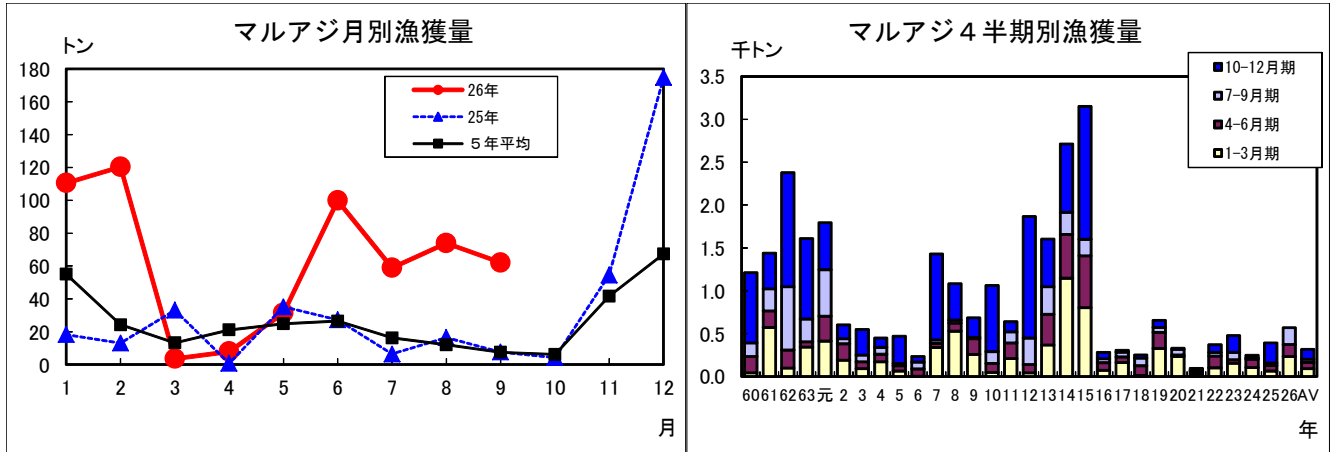


図 マルアジ（アオアジ）まき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年（平成21～25年）の平均値(AV)、平成26年9月24日までの水揚げ量を使用